

canté/cantabaのアスペクト対立に基づく解釈をめぐって

山村, ひろみ
Kyushu University

<https://hdl.handle.net/2324/1932618>

出版情報：イスパニカ. 40, pp.48–62, 1996–12. Japanese Association of Hispanists
バージョン：
権利関係：



canté/cantaba のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって*

山村ひろみ

0. はじめに

スペイン語の *canté* と *cantaba*¹⁾ の機能的差異に関してはこれまでにも様々な説明が提案されてきたが、その中でも特に広く流布し、また、受け入れられたのは、これら二形式をアスペクトをめぐる最小対立項と見做す説明だったと思われる。このアスペクト説はその枠組みにおいて幾つかの種類に分けることができるか²⁾、最も一般的なのは RAE (1994) によって提示されたものであり、それは概略図 1 のように示される³⁾。

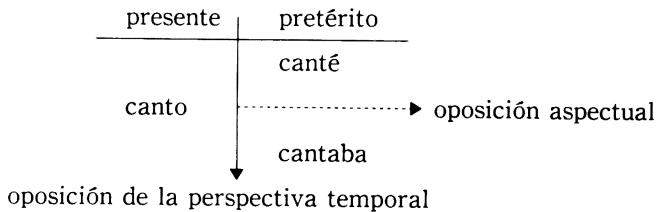


図 1

本稿は *canté* と *cantaba* の機能的差異を図 1 で示されるような枠組で処理することの妥当性を問うことをその目的とする。以下、この問題をめぐる議論は、1. RAE (1994) における *canté/cantaba* の扱い、2. *canté/cantaba* の意味するところ、3. *canté/cantaba* の非対称性、4. *canto* と *cantaba* の平行関係の順に従って展開され、最終的には、*canté/cantaba* の機能的差異を図 1 のような枠組で捉えることはこれら二形式の実態を反映せず問題があること、また、その問題を解決するためには枠組そのものの変更が必要とされることを主張していく。

1. RAE (1994) における *canté/cantaba* の扱い

まず、前節で紹介した RAE (1994) における *canté* と *cantaba* の扱いを見てみよう。

RAE (1994) の著者である Alarcos はこの二形式に関してこれまでにも独自の見解を表明してきたが⁴⁾、RAE (1994) における彼の解釈はその従来の見解を繰り返して述べた部分と新たな見解を加えた部分の二つの部分から成り立っている。そのうち従来の主張と変わらないのは、*canté/cantaba* はともに過去の *perspectiva temporal* を持ち、それが両形式を現在の *perspectiva temporal* を持つ *canto* と対立させていること、そして、*canté* と *cantaba* の違いはアスペクトと呼ばれる範疇の違いであり決して時制の違いではないとする二点である⁵⁾。これに対して、従来の解釈と RAE (1994) のそれとの間に少なからぬ修正が加えられたと思われるには、この両形式の間に設定されたアスペクト対立の素性に関してである。

Alarcos は常に *canté/cantaba* の違いは「終結性」という素性の有無をめぐるアスペクト対立であると主張しており、それは RAE (1994) でも繰り返されている。しかし、その「終結性」の解釈の仕方は RAE (1994) とそれ以前とで異なっている。すなわち、RAE (1994) 以前のそれは単に動詞の語彙素が表す内容の停止を表示するものに過ぎず、*canté* の有標性、*cantaba* の無標性もその意味において解釈されているのに対し⁶⁾、RAE (1994) における「終結性」はそれが適用される動詞の語彙素の種類によって異なる意味内容を実現するものと述べられ、さらに、それは、結局、各動詞の示す内容の「完了性」を示すものであると主張されているからである⁷⁾。

以下では、このような RAE (1994) の見解の妥当性を *canté/cantaba* の実態を観察することによって検証していく。

2. *canté* と *cantaba* の意味するところ

canté と *cantaba* の実態を考察するにあたり、本稿はこれら二形式がどちらも事行命題⁸⁾に適用されたオペレータの具現形と考え論を進めていく⁹⁾。

そして、問題とする事行命題に各形式が適用された際の意味内容の判断は、当該形式による具現化がその事行命題の持つ時間構造のどの部分に対応するかを観察することによって行なうことにする。ここで言う事行命題の時間構造とは、各事行命題の時間軸への投影のことを指す。一般に、事行命題の示すものは開始・発展・終結といった過程を通して時間軸に投影されるが、その在り方は様々である¹⁰⁾。しかし、この事行命題の多様な時間構造は幾つかのグループに整理でき、Vendler はそれを state, activity, accomplishment, achievement と呼ぶ 4 つのグループに分類した。以下では、この Vendler の分類に基づき、各類の代表となる事行命題の canté, cantaba による具現形がその時間構造のどの部分に対応するのかを観察しながら、各形式の意味するところを考察していく。

2.1. canté の意味するところ

本稿が用いる Vendler の 4 分類に対応する事行命題は次のとおり。state 類 : P(María saber la noticia), activity 類 : P(María pasear por el parque), accomplishment 類 : P(María escribir una carta), achievement 類 : P (María llegar a la cumbre)¹¹⁾。以上の事行命題が canté で具現化された時に意味するところをその時間構造との関係で示すと以下のようになる。なお、I は当該事行の開始点、F はその終結点、また、~P は当該事行命題の不成立、P はその成立を示す。

1) María supo la noticia.	~ P	I (=P)	P	(F) ~ P
2) María paseó por el parque.	~ P	I (=P)	P Farb.	~ P
3) María escribió una carta.	~ P	I	~ P Fnat. (=P)	~ P
4) María llegó a la cumbre.	~ P	I, F (=P)	~ P	

各事行命題が canté で具現化された際に表される時間構造中の対応部分は上で示されている。それによれば、state 類事行命題の canté はその開始点に対応することが分かる。一般に、state 類事行命題の時間構造では開始点・終結点が示されないと解釈されているが¹²⁾、スペイン語ではそれが

canté によって具現化される限り、その開始点が明示されるのである。他方、その終結点が *canté* そのものによって示されることはなく、それは当該事行以外の文脈の存在によって理解される¹³⁾。同様のことは activity 類事行命題の *canté* においても観察される。activity 類は state 類事行命題と異なり、その時間構造の中に予め開始点と恣意的な終結点が設定されるが、*canté* が示すのはその開始点であり、終結点が *canté* によって直接示されることはない¹⁴⁾。以上の state, activity 類と対照的な振舞いを見せるのが accomplishment, achievement 類の事行命題である。これらの *canté* による具現化は 3), 4) の図式が示すように、その終結点に対応し開始点を示すことはない。つまり、accomplishment 類事行命題の場合、その *canté* は当該事行が完全に終結しそれ以上継続されることがないことを表し、achievement 類事行命題のそれは、開始と終結の両方を同時に示すことになるが、開始点は常に終結点に先行することから、結局、その *canté* は終結点を表すことができるものである。

さて、1)~4) で示されたことを踏まながら *canté* そのものの意味を考えてみよう。上の観察結果からすると、*canté* による具現化はそれが適用される事行命題の時間構造によって意味するところが異なると言える。しかし、だからと言って *canté* 自体の機能が決定できないわけではない。なぜなら、*canté* による具現化はすべて、それが適用される事行命題の不成立から成立の変化、つまり、~P から Pへの変化に関わっていると考えられるからである。このことは、言い換えるならば、*canté* が当該事行命題の過去における生起、そのことのみを表す形式であることを示すものであり、これはまさに RAE (1994) が主張する *canté* の「完了性」の意味するところと言える。

2.2. *cantaba* の意味するところ

次に 2.1. と同じ要領で *cantaba* の意味するところを観察する。以下は、各事行命題の *cantaba* による具現化が意味するところを、その時間構造との関係によって示したものである。*cantaba* の意味するところは→で、また、

canté によって示されるところは  で記してある。

5) María sabía la noticia.

$$\frac{\sim P \quad I (=P) \dashrightarrow (F)}{P}$$

6) María paseaba por el parque.

$$\frac{\sim P \quad I (=P) \dashrightarrow Farb.}{P}$$

7) María escribía una carta.

$$\frac{\sim P \quad I \dashrightarrow Fnat. (=P)}{\sim P}$$

8) María llegaba a la cumbre.

$$\frac{-\dashrightarrow I, F (=P)}{\sim P}$$

上の図式によると、*cantaba* は *canté* の持つ当該事行命題の不成立から成立への変化の表示という機能に対して二つの異なる関係を示すことが分かる。

まず、*accomplishment*, *achievement* 類について見ると、その *cantaba* は当該事行命題の不成立部分、つまり、その不成立から成立への変化以前の部分に対応している。これは *canté* の「完了性」に対する *cantaba* の「未完了性」を示すものである。一方、*state* 類の *cantaba* は上の二類のそれとは異なった様相を見せ、当該事行命題の不成立から成立の変化が生じた後の結果状態を示している。換言すると、*state* 類の *cantaba* は、*accomplishment*, *achievement* 類の「未完了性」に対して「既完了性」を示すということになる。また、*activity* 類の *cantaba* を見ると、それは当該事行命題の成立以後の部分に対応しているので、一見、*state* 類の *cantaba* と同一視することができそうだが、両者の間には大きな違いがあると考えられる。なぜなら *activity* 類の *cantaba* が示すのは *state* 類のような当該事行命題が成立した後の結果状態ではなく、*canté* によって示される当該事行命題の成立が集積され総体化したものと言えるからである¹⁵⁾。

以上のことから、*cantaba* の意味するところは *canté* のそれに比べて多様であることが分かるが、*canté* と *cantaba* をある素性の有無に関する最小対立項と見做す説にとって最も問題となるのは、この *cantaba* にその多様な意味を統一するような機能を設定することができないという点である。*canté* の場合、その意味するところは、それが適用される事行命題の時間構

造の如何に関わらず、当該事行命題の～PからPへの変化の表示と規定することができたが、cantabaにそのような統一的機能を認めることはできない。それは、まず大きく、～PからPへの変化以前を示すものと～PからPへの変化以後のことを示すものに区分され、後者のグループはその在り方においてさらに二分されるからである。このような実態は、すべてのcantabaに同じ素性、つまり「完了性」に対する無標項という価値を付与することの難しさを明示したものと思われる¹⁶⁾。

3. canté/cantabaの非対称性

canté/cantabaの二形式はスペイン語の動詞パラダイムとしてすべての動詞に備わったものであるが、その出現は、以下の例文が示すように、事行命題の内容によって制約を受けることがある。

9) *Fueron/Eran las ocho.

9)' En el reloj del vestíbulo dieron/daban las ocho.

10) María *llevó/llevaba un año estudiando japonés.

11) La carta *dijo/decía que ~ . (Porto Dapena 1989: 91)

11)' Platón dijo/decía que ~ .

12) Yo ²fui/era niña.

12)' Yo fui/*vivía una niña normal.

13) Yo viví/*vivía en España cuatro años.

9) が示すようにserを使った時間表現でcantéが出現できないのは周知の事実であるが、その理由についてアスペクト論者が言及することは少ない。Bullはそれを時間表現の持つ特殊性、すなわち、時間を告げる行為は瞬間的には行なわれないということに起因させているが¹⁷⁾、それではなぜ同じ時間表現であるP(dar las ocho)ではcantéが出現できるのか。また、同様に10)のllevarを用いた期間表現もcantéで具現化されることはなく、11)のように無生物が主語となる伝達文においてもcantéが出現することはない。さらに、12)は過去に完全に終結した事行であるにも拘らず、ある特定の文

脈が与えられない限り *canté* 形が出現することは難しい¹⁸⁾。しかし、その内容が 12) とよく似た 12)' では特殊な文脈がなくても *canté* が出現でき非文になることもない。13) は *canté* の限定性を示すためにアスペクト論者がよく引き合いに出す例であるが、これにも問題がある。なぜなら、時間的限定を示す時の副詞句は *cantaba* とも共起することが証明されているにも拘らず¹⁹⁾、13) では *cantaba* を用いると非文になるからである。

以上、*canté/cantaba* の出現は、それが適用される事行命題の内容に応じて制約を受けることがあるという事実を見た。これら二形式の機能的差異をアスペクトの違いとする見解、また、広く両形式の違いを話者が当該事行を捉える際の視点の違いとする見方は、この *canté/cantaba* の出現に見られる非対称性をどのように説明するのか。通常、アスペクト論者が持ち出す例文は予め *canté/cantaba* の両形式による具現化が可能なものに限られているので、そのどちらか一方、特に *canté* による具現化が不可能な事行命題の存在が指摘されることはない。しかし、*canté* と *cantaba* を一組として捉える見方にとて、その片方が欠如するという現象は決して見過ごすことのできないものであり、その主張の有効性を保証するためには、そのような現象が生じる理論的根拠を明らかにする必要があると思われる。

4. *canto* と *cantaba* の平行関係

次に *canté/cantaba* と *canto* との関係について見てみよう。RAE (1994) では、*canté/cantaba* は過去の *perspectiva temporal* を持ち、*canto* は現在のそれを持つものとして互いに明確に区別されているため、前者二形式と *canto* の間の相関関係について述べることは難しい。しかし、*cantaba* と *canto* の実態を観察してみると、そこには *perspectiva temporal* の違いを越えた明らかな類似性が観察される。そこで、以下では、この *cantaba* と *canto* の間にある機能的類似性の証左となる事象を列挙していく。

- 14) María dijo:—Mi padre canta muy bien.

→ María dijo que su padre *cantó/cantaba muy bien.

- 15) María dijo que su padre cantó muy bien.

→ María dijo:—Mi padre cantó/*canta muy bien.

14) が示すように、スペイン語の話法転換に伴う時制変化では canto は必ず cantaba に変わり、canté になることはない。確かに 15) が示すように主動詞が過去時制を取る間接話法文の従文内に canté が出現することはあるが、それは canto の変化形ではない。このいわゆる時制の一貫という現象に見られる canto と cantaba の相関関係はこれら二形式がその機能において類似することを明確に示すものである。また、canto と cantaba は、以下に見るよう、その解釈が一義的に決定されないという点でも一致している。

- 16) María sale de casa temprano.

- 16)' Mañana María sale de casa temprano.

- 16)" María siempre sale de casa temprano.

- 17) María salía de casa temprano.

- 17)' Mañana María salía de casa temprano.

- 17)" María siempre salía de casa temprano.

- 18) María salió de casa temprano.

- 18) ''Mañana María salió de casa temprano.

- 18)" María siempre salió de casa temprano.

canto で具現化された 16) の意味は一義的には決まらず、そのためには何らかの文脈あるいは時の副詞句が必要である。その結果、付加される時の副詞句の種類に従って、同一文が発話時における主語の予定を表したり(16')、主語の属性的行為(16")を表すことになる。さて、17)', 17)"を見ると、cantaba がこの canto とまったく同じ振舞いをすることが分かる。すなわち、当該事行命題が cantaba で具現化されただけの 17) の意味は曖昧であり、それを確定するには 16) と同様に文脈や時の副詞句が必要で、実際、上記例文ではそれらの助けを得て初めて既定の過去時における主語の予定や(17')、主語の属性的行為(17")の表現が可能となっているのである。一方、

canté は *cantaba* とは対照的に予定を表すことはできず(18')，また，習慣を示す *siempre* という副詞が付加されても主語の属性的行為を表すことはない(18")。

さらに，以下の例文が示すように，3. で扱った *cantaba* でしか具現化されない事行命題はすべて *canto* による具現化が可能のこと，また，逆に，*cantaba* による具現化が不可能な事行命題は *canto* による具現化も難しいという事実も *canto* と *cantaba* の機能的類似性を明示するものと思われる。

19) *Fueron/Eran las ocho. → Son las ocho.

20) María *llevó/llevaba un año estudiando japonés. → María lleva un año estudiando japonés.

21) Yo [~]fui/era niña. → Yo soy niña.

22) Yo viví/*vivía en España cuatro años. → Yo *vivo en España cuatro años.

以上の *canto* と *cantaba* の間に見られる類似性から，本稿はこれら二形式は同じ機能を共有した一組として扱うべきと考える。この考えは結果的に Rojo(1974, 1988, 1990)，山村 (1994, 1995) で提案された「*canto* は当該事行命題が発話時と同時関係にあること，また，*cantaba* はそれが既定の過去時と同時関係にあることを表す」という見解を支持することに繋がる。この見解に従えば，*canto* と *cantaba* はその基準時は違うものの，それが当該事行命題と基準時の間に設定する時間関係はどちらも同じ「同時性」であり，結局，この「同時性」が本稿の主張する *canto* と *cantaba* の共通機能となるからである。

しかし，この *canto* と *cantaba* を一組にする考えに反するような現象がないわけではない。いわゆる「歴史的現在」と呼ばれる *canto* の用法がそれである。一般に，この歴史的現在として出現した *canto* は *canté* に置き換え可能であり，それを基に *canté* も *cantaba* と同様に *canto* に対応すると主張することは不可能ではない²⁰⁾。しかし，本稿は，この見方には次のような問題点があると考える。まず，上記の主張は動詞体系内に見られる各形式の機能上の相関関係と話者が言語外現実を表現する際の表現方法上の問題を混同している点で

ある。3. や4. で示したように *canto* と *cantaba* の間には明らかな機能的類似性が存在する。この関係は体系的なものであり、それ故、そこには話者の選択が入り込む余地がない。他方、*canté/cantaba* が *canto* に置換可能というのは、ある過去の事行に対する話者の表現方法の選択の結果にすぎず、体系的なものとは言えない。また、この主張を受け入れたとしても、3. で指摘した *canté/cantaba* の非対称性および 4. で述べた *canto/cantaba* の機能的類似性は何ら解明されず未解決の問題として残ってしまう可能性がある。以上のことから、本稿は *canté/cantaba* が *canto* に置き換えられるという事実は認めるものの、それが *canto* と *cantaba* を一組にするという見解を無効にするようなことはないと考える。

5. 結 語

ここまで考察は次のようにまとめられる。

- (1) *canté/cantaba* を「完了性」「終結性」といった所与の素性の有無をめぐる最小対立項と見做すことは難しい。
- (2) ある事行命題における *canté/cantaba* の出現には非対称性が認められる。
- (3) *canto* と *cantaba* の間には機能的類似性が認められる。

以上のことから、本稿は *canté/cantaba* の機能を RAE (1994) が示した図1の枠組みで捉えることは当該二形式の実態に合わないものと考える。そして、この結果を基に *canté/cantaba* の機能を新たに記述し直すならば、それは図2のようになると主張したい。

canté: O-V canto: OoV
 cantaba: PoV

図 2

上の図の記号は山村 (1994) で提案されたもので、O-V は発話時に対する前時関係、OoV は発話時に対する同時関係、PoV は既定の過去時に対する同時関係を示す。これによると、*canté* と *cantaba* は何も共通項を持たず、それは

この二形式が最小対立項でないことを示す。一方, *canto* と *cantaba* は oV の示す「同時関係」という機能を共有し、両者の違いはその関係が設定される基準時にあると解釈される。さて、この図 2 は本稿で考察された現象には有効であるが、問題がないわけではない。例えば、この図の内容と 3. で触れた *canté* で具現化されない事行命題の関係である。今のところ本稿は 2. での考察を踏まえ、「前時性」を表す -V とは～P から P への変化の実現のことにして他ならず、*canté* で具現化されない事行命題は、その意味内容が *canté* の持つこの～P から P への変化の実現という機能にうまく適応しないのであろうと考えている。しかし、その妥当性はまだ十分に検討されたわけではない。また、*canté* 対 *canto/cantaba* の対立をどう捉えるかも問題である。このような本稿で取り扱うことのできなかった問題は今後の課題としておきたい。

注

- * 本稿は日本イスパニヤ学会第 41 回大会（1995 年 10 月 21 日、於大阪外国語大学）において「CANTE/CANTABA のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」という題目で発表した内容に加筆・修正を加えたものである。
- 1) 以下、本稿では RAE(1994) が *pretérito* と呼ぶ形式を *canté* で、また、*copretérito* と呼ぶ形式を *cantaba* で表すこととする。
- 2) 図 1 で示される考え方以外の代表的なものとして動詞パラダイム全体を「完了アスペクト」と「不完了アスペクト」に分けるものがある。この考えに従うならば、「完了アスペクト」には全複合形と *canté* が、また、「不完了アスペクト」には *canté* 以外の全ての単純形が属すことになる。Cfr. RAE (1973) p.462.
- 3) この図は RAE (1994:158) の表をもとに書き換えたものである。
- 4) Cfr. Alarcos (1980³) pp.50-89, 106-119, 120-147.
- 5) Cfr. RAE (1994) p.161.
- 6) Cfr. Alarcos (1980³) p.128.
- 7) Cfr. RAE (1994) p.161.
- 8) 動詞句とその主語からなる出来事・状態を総称して事行と呼ぶ。
- 9) この理由については山村 (1996b) を参照されたい。
- 10) 例えば「山頂に到着すること」という事行命題では開始・発展・終結が同時に起こると考えられるが、「そのニュースを知ること」という事行命題では開始点は明示されてもそれ以後の過程は文脈がない限り判断されない。

- 11) 事行命題は P(命題内容) によって示す。
- 12) そのため図中の F には括弧がつけられている。Cfr. Smith (1991) p.37.
- 13) state 類事行命題の canté による具現化はその終結点に対応するという主張もある。
しかし、本稿はそのような立場を取らない。この点についての詳しい議論は山村 (1996b:119-121) を参照されたい。
- 14) activity 類事行命題の canté も終結点を表すという主張がある。しかし、本稿はそのような立場は取らない。詳しくは山村 (1996b:122-123) を参照されたい。
- 15) これは María paseaba por el parque. の真は必ず María paseó por el parque. の真を、また、María paseó por el parque. の真は必ず María paseaba por el parque. の真を示すことに拠る。
- 16) すべての cantaba にあてはまる統一的機能として当該事行命題の $P \rightarrow \sim P$ に言及しないということを挙げができるかもしれない。しかし、そうすると対立項である canté の機能は $P \rightarrow \sim P$ ということになり、これは 2.1. で得た結論と矛盾することになる。
- 17) Cfr. Bull (1968³) p.51.
- 18) 筆者の行なったインフォーマント調査では、12) のような文脈を全く欠いた單文で canté が出現することは一例もなかった。そのため発表の際にはこの 12) に非文の印をつけておいたが、その後、数名のスペイン語話者の方が以下の文脈では canté が出現することを指摘して下さった。貴重なデータ提供に対して謝意を表したい。¿Te acuerdas de ello? Sí, claro, es que yo también fui niña.
- 19) Cfr. 山村 (1996a)
- 20) Cfr. Alarcos (1980³) p.128, p.133.

参考文献

- Alarcos Llorach, E. (1980³) : *Estudios de gramática funcional del español*, Gredos, Madrid.
- (1994) : *Gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.
- Bull, W. (1968³) : *Time, tense and the verb. A study in theoretical linguistics with particular attention to Spanish*, University of California Press, Berkeley.
- Hernández Alonso, C. (1984) : *Gramática funcional del español*, Gredos, Madrid.
- Porto Dapena, J.A. (1989) : *Tiempos y formas no personales del verbo*, Arco/Libros S.A., Madrid.
- Real Academia Española (1973) : *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpe, Madrid.
- (1994) : *Gramática de la lengua española* por Alarcos Llorach, Espasa-Calpe, Madrid.
- Rojo, G. (1974) : "La temporalidad verbal en español", *Verba* 1, pp.68-149,

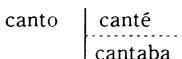
- Universidade de Santiago de Compostela.
- (1988) : "Temporalidad y aspecto en el verbo español", *Lingüística Española Actual*, pp.195-216.
- (1990) : "Relaciones entre temporalidad y aspecto en el verbo español", en I.Bosque (ed.), *Tiempo y aspecto en español*, pp.17-43, Cátedra, Madrid.
- Smith, C. (1991) : *The Parameter of Aspect*, Kluwer Academic Press.
- 山村ひろみ (1994) : 「複文における indefinido と imperfecto—過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察」, *Hispánica* 38, pp.120-135.
- (1995) : 「複文内の indefinido と imperfecto—過去の主動詞に従属した関係節におけるその実態と考察」, *Hispánica* 39, pp.145-158.
- (1996a) : 「Pretérito indefinido, pretérito imperfecto と時の副詞句(その2)」『原誠教授退官記念論文集』 pp.395-412.
- (1996b) : 「canté と事行の時間構造」『獨佛文學研究』第46号 pp.113-133, 九州大学独仏文学研究会。

Sobre la interpretación basada en la oposición aspectual de *canté/cantaba*

Hiromi YAMAMURA

Este ensayo tiene como objetivo someter a examen la pertinencia de la interpretación basada en la oposición aspectual de las formas *canté* y *cantaba*.

Como es bien sabido, esta interpretación aspectual es la más extendida y aceptada de las que intentan aclarar la diferencia funcional de dichas formas. Su esquema representativo (RAE 1994:158) se muestra como sigue:



Según este esquema, las formas *canté/cantaba* se oponen juntas a la forma *canto* que pertenece a una perspectiva temporal diferente y ellas mismas se distinguen una a otra en la categoría llamada aspecto. Y en esta oposición aspectual, generalmente se considera que la forma *canté* es la marcada y la forma *cantaba* es la no marcada.

En este ensayo intentamos investigar las situaciones reales de las formas *canté* y *cantaba* desde el punto de vista funcional. Y se ha comprobado que dicho esquema no encaja bien a la realidad de *canté/cantaba* porque se ha manifestado que hay casos que rompen el sistema funcional del que depende. Los casos se resumen como sigue:

- 1) Las formas *canté/cantaba* no son una pareja opositiva mínima porque no todas las formas de *cantaba* pueden indicar la no-perfectividad. Por ejemplo, si la proposición es del tipo estativo como [María saber la noticia], su concretación en la forma *cantaba* no significa la no-perfectividad sino el resultado de la perfectividad de dicha proposición.
- 2) Como demuestra muy bien la expresión de hora, hay unas proposiciones que nunca pueden tomar la forma *canté*. Esto sugiere que hay una asimetría entre la forma *canté* y la forma *cantaba*.
- 3) Como demuestra muy bien la concordancia de tiempo, hay una similitud

funcional entre la forma *cantaba* y la forma *canto*.

Basándonos en el resultado de dicha investigación, decidimos cambiar el esquema sistemático de las formas *canté/cantaba/canto* como sigue:

canté:O-V *canto*: OoV

cantaba: PoV

El signo O-V significa la anterioridad al momento del habla. El signo OoV significa la simultaneidad con el momento del habla. Y el signo PoV significa la simultaneidad con el momento ya determinado del pasado. Según este esquema, la forma *canté* y la forma *cantaba* no son una pareja opositiva mínima porque no hay nada que compartan. En cambio, la forma *cantaba* y la forma *canto* forman juntos un grupo cuyo rasgo común es la simultaneidad.